

◇ 9月の天文暦 ◇

日時	記	事
4 20	水星	留
5 13	望	
6 14	月	最近
8 17	白露	(太陽黄経 165°)
11 12	火星	留
12 4	下弦	
14	水星	西方最大離角
19 17	土星	留
24	朔	
21 15	月	最遠
24 2	秋分	
28 2	上弦	



(撮影 成相恭二)

B. スト্রেムグレン

1909年コペンハーゲンの生れ。父親は天文台長であった。12歳の頃から大学の講義をきき、天文学に志した。はじめ彗星の写真観測や軌道決定からはじめて、軌道論に関する論文も書いた。10台の終りころから望遠鏡の光学理論を勉強し、シュミット・カメラの理論を完成させた。天体物理は20台からで、大気構造や吸収線形成論の完成にいろいろな形で寄与した。ことに1940年出版のEllis Strömgren教授記念論文集に掲載された太陽大気の化学組成に関する論文は、いわゆる微細解析法を正確明快な形で記述し、しかもそれを本格的に応用した最初の論文として有名である。内部構造論についても論文をいくつも書いている。

戦後アメリカに招かれ、やがてヤーキス天文台(シカゴ大学)の台長となる。星間物質の研究をしていわゆる“スト্রেムグレン球”の概念を打ち立てたり、干渉フィルターを用いる狭帯域測光システムを提唱したりした。後に中帯域測光システム(uvbyシステム)やH $\beta$ 線

の強さを測るシステムも提唱した。あらゆる恒星の量的分類と過去の歴史をたどるのがその目的である。

1957年ころヤーキス天文台長をやめてプリンストンの高級研究所に移り、さらに現在はコペンハーゲン天文台にもどって研究に専念している。昨年からIAUの会長にも選任された。スト্রেムグレン教授は、理論屋とか観測屋とか区別することのできない全く万能型の学者で、その理解の深さは抜群である。幼時から特別の天才教育を受けたのが成功した例であろう。しかもガチガチ勉強のタイプではなく、のんびり型である。ヤーキスの台長をしているときにも、テープレコーダーをつかって論文や手紙を口述して秘書に清書させるような“モーレッツ管理職”のタイプではなく、いつもリラックスしているように見えた。論文の書きっぷりにもその性格は現われている。教科書を読むような感じで読者を自然に説得するタイプである。観測のやり方も非常に念入りでていねいで、短時間でなるべく多数の星をものししようなどというさもないことはしない。また、計算は絶対に間違えないようにあわてずにやるのがコツだという話であった。

(大沢清輝)

